

## 1 はじめに

本校、生産技術科は、「植物の栽培をとおして、土が生み出す力、酪農をとおして動物の生きる力を学び、将来の農業に寄与する人材を育成する」ことを目標に教育活動を行っている。農業選択科目に草花・果樹・野菜・造園技術・畜産の5科目を設置し、そのうち1科目を選択して2年生・3年生で継続履修している。

科目「畜産」では、大単元「酪農」を学習活動の中心とし、教材として乳用牛を用いる。

平成20年1月の中央教育審議会答申においては、学習指導要領改訂の基本的な考えが示され、平成22年6月に公示された高等学校学習指導要領解説（農業編）で、具体的な改善策が三つの視点を基本に示された。

- ① 将来のスペシャリストの育成に必要な、専門分野に関する基礎的・基本的な知識、技術及び技能の定着を図るとともに、体験的学習をとおして実践力を育成する。

さらに、資格取得や有用な各種検定、競技会への挑戦等、目標をもった意欲的な学習をとおして、知識、技術及び技能の定着、実践力の深化を図るとともに、課題を探索し解決する力、自ら考え行動し、適応していく力、コミュニケーション能力、協調性、学ぶ意欲、働く意欲、チャレンジ精神などの積極性・創造性等を育成する。

- ② 将来の地域産業を担う人材の育成という観点から、地域産業や地域社会との連携・交流を通じた実践的教育、外部人材を活用した授業等を充実させ、実践力・コミュニケーション能力、社会への適応能力等の育成を図るとともに、地域産業や地域社会への理解と貢献の意識を深めさせる。

- ③ 人間性豊かな職業人の育成という観点から、人と接し、自然やものとのかかわり、命を守り育てるといふ職業教育の特長を生かし、職業人として必要な人間性を養うとともに、生命・自然・ものを大切にすする心、規範意識、倫理観等を育成する。

平成23年1月に中央教育審議会から答申された「今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方」の中で、「キャリア教育・職業教育の課題と基本的方向性」では、「学校における職業教育は、基礎的な知識・技術やそれらを活用する能力、仕事に向かう意欲や態度等を育成し、専門分野と隣接する分野や関連する分野に応用・発展可能な広がりを持つものであること。職業教育において実践性をより重視すること。」とされている。

さらに、高等学校の専門学科における職業教育の推進方策を、

- ① 専門分野の基礎的・基本的な知識・技術を定着させる。職業の多様化へ対応するためにも、一定の専門分野に共通する知識・技能を身に付けられるように配慮する。
- ② 座学と実験・実習の連携を図り基礎的・基本的な知識・技術の一層の定着を図るとともに、実践をとおして、問題解決能力や自発的・創造的な学習態度の充実に努める。
- ③ 地域の産業・社会を担う人材を育成するためには、学校を卒業してからも自らの力を発揮できるような実践性が必要である。地域や学校の実態、生徒の特性、進路等を考慮し、地域・社会との連携を図り、体験的な学習や地域企業との連携を図った長期間の実習等を通じて、実践的な教育活動を積極的に実施する。

④ 産業，社会の急速な変化に迅速かつ柔軟に対応する観点から，各学校は，地域・社会の動向を踏まえつつ，教育課程を見直す。

とした。

そこで，本研究では，地域との連携・様々な行事を活用した効果的な学習活動について研究し，生徒の人的成長の伸長を図るとともに，地域農業が必要とする人材育成，さらに進路活動につながる学習プログラムの作成及び指導方法を確立することを目標に主題設定した。

## 2 研究方法

### (1) 生徒の農業への意識を調査する

本校，生産技術科の生徒にアンケートを実施し，生産技術科への志望理由や農業に対する意識，農業実習をとおしての勤労意欲などについて調査を行う。アンケートの結果を検討し，体験的学習の内容や展開方法の参考とする。

### (2) 地域農業の実態を調査する

日本の農業は，農家数の減少と高齢化が進んでいる。そこで，千葉県農業全体の構造を把握すると同時に，本校生徒の主な居住地の酪農家の現状を調査する。

さらに，農業経営者や農業従事者・新規就農を目指す生徒に対して，地域や地域農業から見た生徒の評価（能力・人間性・勤労観等）をうけ，地域が求める生徒像や地域農業が求める産業人を調査する。この調査結果を基に人材育成の方法を検討する。地域の求める人材を調査し今後の進路指導の参考とする。

### (3) 地域との連携，行事等への参加を活用した取り組み等の年間指導計画を作成する

地域との連携，行事等への参加を年間指導計画内に位置付ける。地域連携や行事等への参加は，生徒自身が酪農の知識・技術がどの程度身に付いたかを検証するうえで絶好の機会である。また，校外実習や乳牛共進会，各種競技会に参加することにより，基礎的・基本的な知識，技術及び技能の定着効果と，コミュニケーション能力の向上を含めた思考力・判断力・表現力の育成にどれだけの効果があるか検証する。

### (4) 評価項目の作成と評価方法の検討

生徒自身の自己評価は，学習活動を行う目的や学習活動を終えての内容・理解度・反省・今後の課題を記録できるようにし，次回につなげていける記録簿を検討する。

### (5) 生徒の進路選択への効果を考察する

生徒の職業意識を調査し，畜産産業を進路選択の一選択肢としてどの程度意識しているか検証し，学習プログラムの考察にする。

## 3 研究計画

平成22年度	5月	研究計画の立案
	5月～翌年3月	酪農が関係する諸行事への参加
	5月～12月	生徒及び地域の評価票の作成および調査の実施
	2月	生徒の意識調査（1回目）
	3月	平成23年度年間指導計画の作成
平成23年度	4月	中間報告まとめ

4月～12月

酪農が関係する諸行事への参加

5月～9月

千葉県および地域農業の実態調査

10月 生徒意識調査（2回目）

12月 研究報告まとめ

#### 4 結果

##### (1) 生徒の意識調査

生徒の意識調査は、平成23年2月と平成23年10月の2回実施した。

(グラフ中の3年生は平成21年度入学生、2年生は平成22年度入学生、1年生は平成23年度入学生である。)

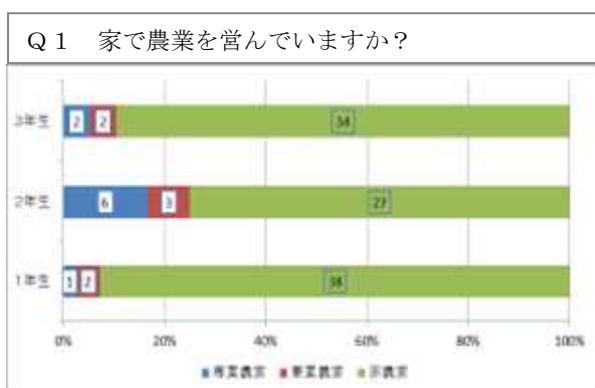


図1 アンケート結果「稼業について」

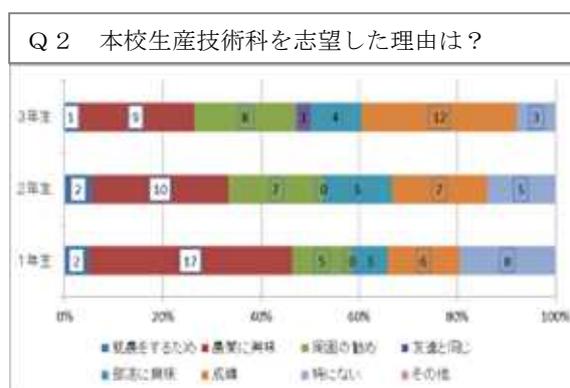


図2 アンケート結果「志望理由について」

年々農家数の減少とともに、本校に入学してくる農家の子弟も減少している。しかし稼業が専業農家または兼業農家の家庭は全体の15%程度あり、少ないながらも後継者として農業を行う基盤は存在している。

志望理由では「就農をするため」や「農業に興味があり」と農業について目的意識を持って生産技術科に入学した生徒は全体の35%を超えている。

稼業が農業に携わってなくても、農業に興味関心があり入学する生徒は多い。

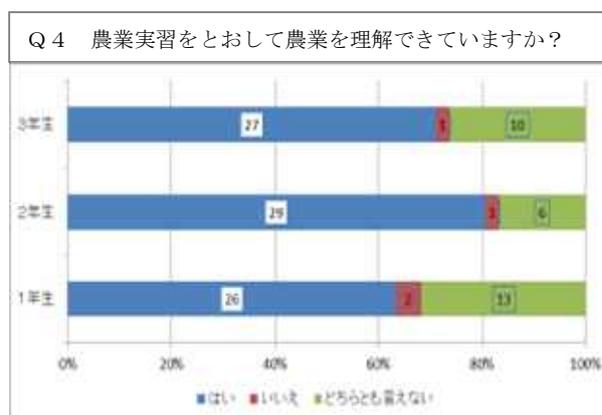
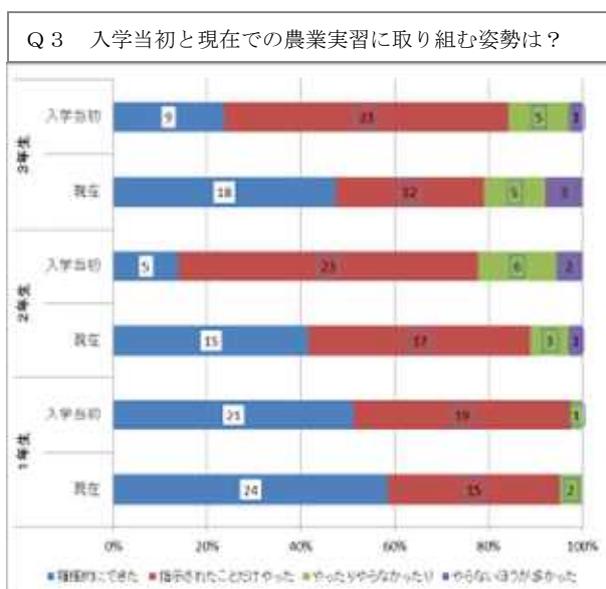


図3 アンケート結果「農業実習への取り組み」

アンケート結果「農業への意識」

入学以降、農業実習を行ってきたことにより、産業としての農業を理解し、農業実習に取り組む姿勢も積極的になった生徒が増加した。

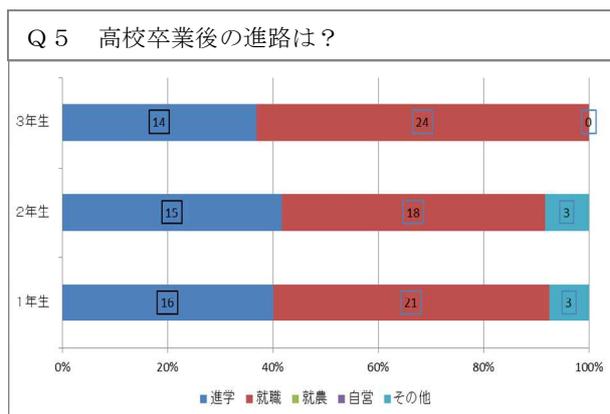


図4 アンケート結果「卒業後の進路について」



図5 アンケート結果「就職希望者の希望する職種」

「高校卒業後、就農をするため」や、「農業に興味関心がある」と志望し、農業実習でも積極的に取り組むことができた生徒達であるが、高校を卒業した後すぐに農業経営者として就農を希望する生徒はいなかった。

高校卒業後、農業経営者として就農を希望する生徒はいないが、就職を希望している生徒の中で「農業」または「農業関連産業」の仕事に就きたいと思っている生徒が育ってきた。

## (2) 地域農業の実態調査

### ア 千葉県内および本校周辺地域の農家数等の状況



図6 千葉県農業の実態調査の結果

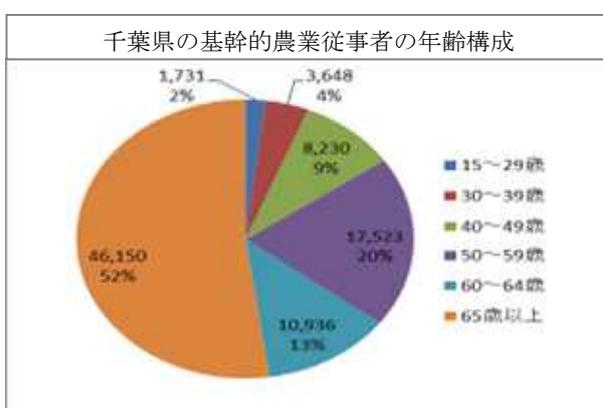


図7 千葉県の農業従事者の年齢構成調査の結果

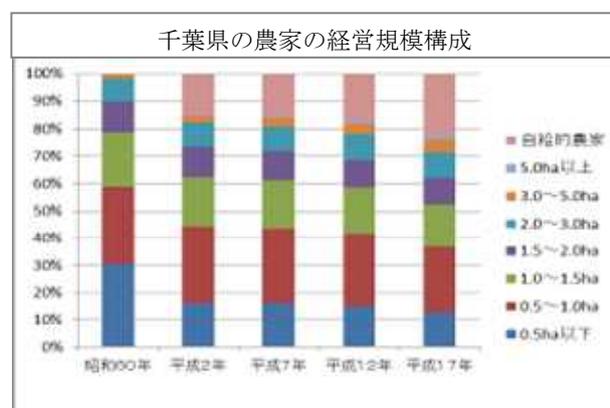


図8 千葉県の農業経営規模構成調査の結果

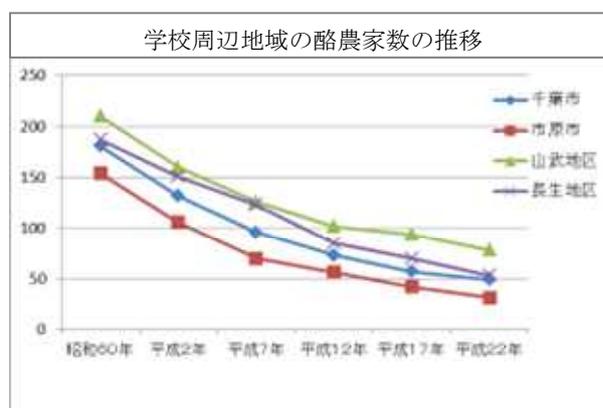


図9 地域酪農の実態調査の結果

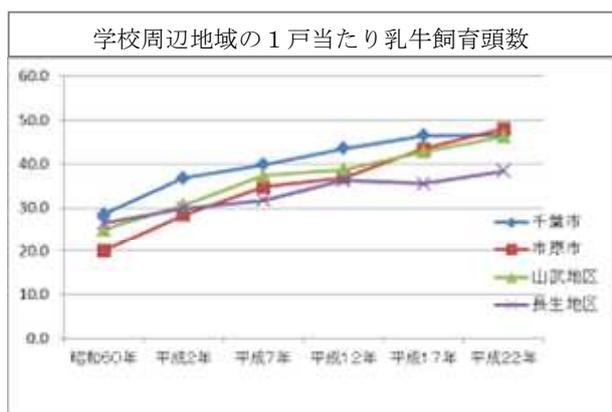


図 10 地域酪農家の乳牛飼育頭数調査の結果

千葉県の実農家数は、年々減少し、昭和60年から平成17年までの20年間で、約45,000戸が減少した。また、基幹的農業従事者の年齢構成は、平成17年の調査では、65歳以上が全体の50%以上を占め、15歳から29歳の若者は2%と非常に少ない。農家数の減少や若者の従事者数が低い値である一方、経営規模は拡大している状況である。

また、本校が位置する山武郡大網白里町周辺地域（千葉地域・市原地域・山武地域・長

生地域）の酪農業の状況についてみると、酪農家数は年々減少し、従事者の年齢も高齢化が進んでいる。しかし、一戸当たりの飼育頭数は増加傾向を示しており経営規模拡大が行われている。

本校が位置する地域は乳用牛総飼育頭数で見ると、千葉県全体の約25%に達し酪農が盛んな地域である。

#### イ 地域畜産業が求める後継者および新規就業者

畜産業は他の農業分野より法人化が進んでおり、雇用の確保が期待されている。しかし就業希望者が少なく、離職者率が高い。また、後継者の育成には多くの課題があり、今後の担い手確保が危惧される。このような状況から、今後の後継者・新規就業者の確保及び農業従事者の確保・定着を促進するため、千葉県畜産協会が中心となり産・官・学で「千葉県畜産新規就業者確保・定着促進運営協議会」を設置した。

協議会の中で、雇用する側の要望および課題として

- ・知識技術が定着していない
- ・1つの失敗にくじけてしまい、再チャレンジしようという気がない
- ・向上心が足りない
- ・畜産という産業が理解されていない
- ・自分が畜産産業に合っているか自己分析ができていない
- ・各分野とも知識技術は多岐にわたるため、習熟するのは大変である
- ・後継者の育成には時間がかかる
- ・従業員を雇用したいが、経営が逼迫している

などがあげられた。

また、畜産業が学校に求めることとして、

- ・畜産の基礎知識・技術の定着
- ・勤労意欲および向上心の育成

などが述べられた。

#### (3) 地域との連携、行事等への参加を活用した取り組み等の年間指導計画の作成

本校の酪農部門では、地域との連携、地域行事等への参加、外部講師を活用した取り組みを行っている。

表1 年間の諸行事

年 間 諸 行 事 (酪農関係)			
	月	行 事	事前指導
一 学 期	4月	酪農選抜生徒オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・乳牛の各部の名称及び見方の学習</li> <li>・乳牛の基礎知識の学習</li> <li>・プレゼンテーション方法の学習</li> </ul>
		削蹄講習会	
	5月	牛群審査(体型審査)	
	6月	長生・夷隅ブラックアンド・ホワイト(乳牛共進会)	
		家畜審査競技会乳牛の部(千葉県学校農業クラブ連盟)	
		季美の森小学校 動物ふれあい教室(酪農体験)	
夏 季 休 業 中	毛刈り講習会		
	校外実習〔希望者(千葉県内・北海道内)〕		
	千葉県乳牛共進会		
二 学 期	9月	削蹄講習会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・乳牛の扱いについての学習</li> <li>・乳牛飼養管理上の専門知識の学習</li> <li>・乳牛の繁殖生理についての学習</li> </ul>
	10月	東金特別支援学校 動物ふれあい教室(酪農体験)	
		牛群審査(体型審査)	
11月	みやざく祭(文化祭)		
三 学 期	1月	東金特別支援学校 動物ふれあい教室(酪農体験)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・乳牛の繁殖生理についての学習</li> </ul>
	3月	乳牛雌を用いた受精卵作出実験実習 千葉県ブラックアンド・ホワイト(乳牛共進会)	

### ア 地域との連携

地域連携では、小学校及び特別支援学校の児童生徒を迎えての「動物ふれあい教室(酪農体験)」実施する。本校生徒がお世話係となり、児童生徒に乳牛の特徴や管理作業を教える。本校生徒は身に付けた知識技術を確認すると同時に、教え伝える技術を身に付けることを目的としている。

酪農体験を終えた児童から、

- ・牛は大きくて怖かったけど、優しく教えてもらったから牛に触れた。
- ・初めて牛にエサをあげられてうれしかった。
- ・牛の上の前歯が無いことを初めて知った。

など、牛の管理作業を体験したうれしさや、初めて知った驚きなどの感想を得た。本校生徒は、コミュニケーションを持つ大切さや、教えることによって自らの知識、技術の定着度を認識することが出来た。



図11 動物ふれあい教室の様子



図12 動物ふれあい教室の様子

### イ 地域行事への参加

乳牛共進会は、酪農家の乳牛を一堂に会し、部門(月齢)ごとに体貌(体型・乳器)・歩様の比較審査を行う品評会である。また、牛群検定(体型審査)は酪農家ごとに、日本ホルスタイン登録協会の審査員によって、牛の体型や、各部位の状態を審査し、日頃の飼養管理が適正に行われ、月齢に応じた発育、泌乳能力の高さ等を点数で表し、総合得点で判定する。

乳牛共進会・牛群検定は、本校の乳牛がどのくらいの能力を持ち、酪農家所有の乳牛との能力差を推し量る場である。また乳牛共進会は、乳牛とハンドラーとの間に信頼関係を築き、乳牛の歩様や姿勢を指示のままに操れるように調教する必要がある。

生徒は、酪農関係の方々と接することにより、コミュニケーション能力を養い、乳牛の見方や扱い方、広い視野を持ち地域産業について理解を深めることができる。



図 13 牛群検定(体型審査)の様子



図 14 乳牛共進会の様子

#### ウ 外部講師を活用した取り組み

本校では、削蹄を削蹄師の方に依頼している。また、乳牛共進会のときは毛刈りを得意とする方に依頼している。この技術は職員では生徒に伝えることが困難な分野である。削蹄は実習時間に実施し、削蹄時の注意点や、蹄の状態などを説明しながら削蹄を行ってもらえるように依頼している。

毛刈りは夏季休業中に依頼している。毛刈りは時間をかけ、一頭一頭の特徴を捉え、適切に毛を刈ることを学習している。削蹄や毛刈りは生徒の目の前で行われるため、一つ一つの動作が分かりやすい。

牛群審査（体型審査）各部位の採点を行っているときは、審査員の動きや視線から、乳牛の見方を学習する。さらに総合得点集計時には、得点の解説やその乳牛の良い点、改善が必要な点について丁寧な説明を受けている。

本校農場で実施される削蹄や毛刈り、牛群検定は専門的見地からの説明である。

講習会に参加した本校生徒は、

- ・ 間近で観ることが出来、とても勉強になる
- ・ 削蹄や毛刈り、牛群審査は実施しながら解説をしてもらうため理解がしやすい
- ・ 疑問を持ったときに直接聞け、分かるまで教えてくれたのでよかった
- ・ 毛刈りを行うときに直接教えてもらえるので、分かりやすく身に付く

などの感想が述べられた。



図 15 毛刈り講習の様子



図 16 削蹄講習の様子

## エ 校外実習の実施

基礎知識を学校の実験・実習や座学で学ぶことができるが、産業としての酪農をより理解するためには、実戦的経験が必要である。本校では希望者を対象として校外実習を行っている。2年生は県内の酪農家で5日間、3年生は北海道の酪農家での15日間の実習を実施している。

平成23年度は北海道実習に男子1名、女子2名の計3名が参加した。参加した3名の生徒の感想は、学校と酪農家では、基本的な生活サイクルが大きく異なっている。また、酪農が生活の糧であるため、経営に様々な工夫や節約が施されていた。北海道は経営規模が大きく、仕事が集約されていた。また仕事内容が分担され効率よく行われていた。北海道は酪農王国である。という実感を得ることができた。しかし、仕事に慣れず、寝てもすぐに朝が来てしまい辛かった。

などが述べられた。

北海道実習に参加した生徒は、15日間足らずではあったが精神面や、牛に接する姿勢に成長がみられる。

表2 科目「畜産」3年生 年間指導計画

生産技術科3学年科目「畜産(5単位)」学習指導計画			
第1学期指導計画			
月	指導内容	指導のねらい	指導上の留意点
4	乳牛の基礎知識の確認	「畜産・酪農」の内容、学習や評価の方法を理解する。 2年次での畜産は2単位の授業であるが、実習を中心とした授業展開であるため、各部の名称や体の特徴・生活スタイルなどの基礎知識を再確認する。	実際に乳牛を見ながら、口頭試問や生徒自身に説明させ、理解度を探る。
	1 乳牛の特性	乳牛の体の構造と、性質・生態・行動を学習し、乳牛の一生と乳生産を理解する。	酪農業の必要性を十分理解させ、生徒の興味関心を喚起させる。 学習する内容を身近な事柄に結びつけ、理解を深めさせる。
5	2 起源と品種	乳牛の家畜としての歴史と、主な品種を学習し、良い乳牛の選び方を理解する。	乳牛の体の構造と牛の見方(乳牛審査基準)を連動させ、乳牛の理想体型について理解させる。ホルスタイン種の改良の歴史とその特徴を理解させる。
		牛群審査(体系審査)に補助として参加し、牛群審査の実施方法・採点について理解する。	牛群審査の補助を行うことによって、乳牛を審査する基準が自らの基準と合致しているか確認させる。審査員には審査後に配点の理由と乳牛の見方について解説をしてもらう。
6	3 搾乳牛の飼育	おもな飼料の特徴と飼料給与の基本を学習し、日常の飼料の与え方と乳牛管理の要点を理解する。	地域で利用されている飼料について、それぞれの特徴と一般成分を調査させる。乳牛の飼養管理が泌乳と繁殖に大きく影響することを理解させる。 各発育ステージの飼料給与と栄養状態について学習させる。
7			飼料計算の手順を学習し、実際に飼料を設計させる。

第2学期指導計画			
月	指導内容	指導のねらい	指導上の留意点
9	4 繁殖生理と交配・分娩	生殖器の構造とはたらきを学習し、繁殖に用い始める時期を理解する。 発情と発情周期を学習し、交配適期を理解する。 妊娠時の飼養管理や分娩徴候・助産方法を理解する。 受精卵移植技術の意義について理解する。	繁殖の善し悪しが酪農経営に大きな影響を与えることを理解させる。 受胎が1周期遅れることによる酪農経営の損失を学習させ、交配適期を見分ける力を養う。 妊娠時の管理が分娩後に大きく影響することを理解させる。 乳牛の繁殖は人為的に計画されて行われる。また、繁殖方法である人工授精と受精卵移植の意義について理解させる。 ホルモン処置や採卵・受精卵処置について理解する。
10	5 乳牛の育成	子牛の発育とその特性を学習し、ほ乳期及び育成期の管理方法を理解する。	初乳の役割を理解させる。 標準を越える発育を得るための各発育ステージの飼養管理技術を理解させる。 早期分娩の功罪について理解させる。
11	6 泌乳生理と搾乳	乳器の構造及び乳腺での乳合成の仕組みを理解する。 乳腺からの乳排出の仕組みと搾乳方法の実際を理解し、乳処理と乳質改善の原則を身につける。	乳器の構造と乳生産のしくみから、牛乳が血液から生産される尊いものであることを理解させる。 乳の排出に携わるホルモンの役割を理解させる。 搾乳の基本とその手順及び処理法について学習し、消費者が求める品質の高い乳生産を行う態度を養う。
12			
第3学期指導計画			
月	指導内容	指導のねらい	指導上の留意点
1	7 繁殖生理と交配・分娩	受精卵移植技術をドナー・レシピエントのそれぞれのプログラムに従い処置を行う。 受精卵移植技術の有用な点と欠点を理解し、適切に適用できるように理解する。	受精卵移植技術に必要な器具や薬品の名称、適切な取り扱い方法を理解させる。 受精卵移植技術の有用な点と欠点を理解することによって、酪農経営上利益に結びつくことを理解させる。

酪農関係の年間行事などを行うため、基礎知識、技術を学習する機会を、3年生の科目「畜産」5単位の中に位置づける。

年間指導計画の中に、諸行事を直接入れ込んでいない。これは、行事のために授業を行うものではなく、幅広い分野を学習し、知識や技術が豊富になり、自信を持って対応できると考える。

#### (4) 評価項目の作成

学習評価は生徒による自己評価、講師や地域の方々による学校及び生徒の評価、そして教える教師側の評価がある。

生徒の自己評価は「学習・自己評価ノート」を活用し、実験・実習の内容、自己の役割、感想、反省、疑問点、そして自己評価（満足度）を実験・実習ごとに実施した。

生徒の理解度や疑問点、考える方向性がみられる。初めは雑に記入されていたノートだが、次第に要点をつかみ、徐々にレポートとして成立するようになってきた。「学習・自己評価ノート」は、授業の理解度を測るものだけでなく、疑問点や伝わりきれないことを洗い出し、教師側の

授業展開の組み立てを考える資料として活用していく。また外部講師や地域の声は、地域・産業から求められる生徒像を作成するデータとして活用していく。

基礎・基本的な知識、技術の定着率を高めるには、分からないことを分からないままにせず、多くの疑問点や不明な点を集め、理解しやすい形に加工して生徒に提供することだと考える。

表3 学習・自己評価ノート（生徒用） 生徒が記載した内容

学習ノート		氏名
日付	年 月 日 曜日 時間	天気
タイトル		
内容		
役割 学習内容 (記録)		
感想		
反省		
疑問点 (質問)		
自己評価	理解度： 良く理解できた ・ 理解できた ・ あまりできなかった ・ できない 全体： 良くできた ・ 一応できた ・ 普通 ・ あまりできなかった ・ できない	
コメント		

学習ノート		氏名
日付	年 月 日 曜日 時間	天気
タイトル	繁殖生理と交配・分娩 -直腸検査の手法-	
内容	繁殖重要性：乳牛の泌乳は排卵しないと行われず 繁殖が順へなるとよむに牛乳が出ない期間が長くなって分娩の不安定 直腸検査：直腸から子宮を直腸壁越しに生殖器に触れる	
役割 学習内容 (記録)	発情を見逃した後の発情は、21日後の発情期間は280日 直腸検査の前に専用の長い(直腸棒)手袋を着用(着脱前後に消毒する) 直腸に手を入れたら直腸内に子宮のうちは出る 直腸は手を入れてすぐは下方向に下っている 直腸の下に子宮の生殖器があるので確認する。	
感想	牛の直腸の中は、つるつる(ぬるぬる)していました。手を入れた時に圧迫された。 直腸内に腕が2本入ってびっくりした。でも子宮と牛の子宮を自分の手で子宮頸管を掴みました。手の感覚はいいからいい経験でした。	
反省	次の機会には、先生の補助なく自分で子宮頸管から卵巣まで探してみたいです。	
疑問点 (質問)	発情した発情期間はどれくらいですか？	
自己評価	理解度： 良く理解できた ・ 理解できた ・ あまりできなかった ・ できない 全体： 良くできた ・ 一応できた ・ 普通 ・ あまりできなかった ・ できない	
コメント	牛の発情持続期間は約2週間です。発情期間は約12日間です。	

(5) 生徒の進路選択への効果

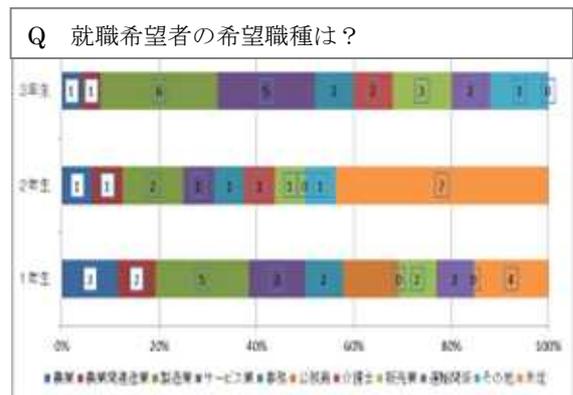
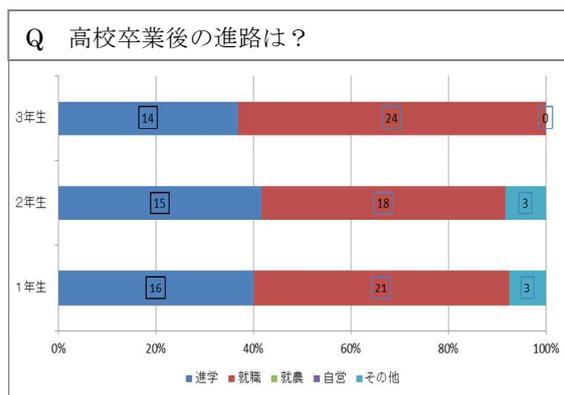


図 17 進路希望調査の結果

今回行った進路希望調査は、高校卒業直後にどんな考えを持っているかを調査したものである。この調査では、すぐに就農を希望する生徒は0人だった。しかし、高校卒業後に農業関係の職業に就きたいと希望している生徒が全体で9名が希望している。

農業実習をとおして農業という産業を理解したと考えられる。農業実習を行うことで生徒の進路の選択肢の一つになっていると考える。

表4 高校卒業後に農業・農業関連の職業を希望者

	農業従事者	農業関連産業
1年生(平成23年度入学生)	1	1
2年生(平成22年度入学生)	1	1
3年生(平成21年度入学生)	3	2

酪農を選択した生徒の進路状況・進路希望状況は次の通りであった。

平成20年度入学生（平成23年3月卒業）6名

- ・女子1名：自宅で酪農を経営。後継希望。卒業後は北海道の酪農家に研修に入る。
- ・男子1名：自宅は非農家。地域の酪農家の従業員として就職。

3年生（平成21年度入学生）6名

- ・男子1名：農業関係の大学へ進学志望

2年生（平成22年度入学生）6名

- ・男子1名：農業関係の大学へ進学希望
- ・女子1名：牧場への就職を希望
- ・男子1名：北海道にて牧場関係への就職を希望

2年次に酪農を選択した生徒は、酪農に興味関心があり積極的に希望した生徒ばかりではなく、第1希望に入れず不本意に選択した生徒もある。授業開始当初は酪農に対して違和感を持っていた生徒も、実習を重ねるごとに、酪農業を理解し、熱心に取り組む姿勢が育ってきた。

## 5 考察および今後の課題

「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」の中で、現代の若者が直面している大きな困難として、完全失業率や非正規雇用率の高さ、無業者や早期離職者の存在があげられている。さらに、コミュニケーション能力などの職業人としての基本的な能力の低下や、職業意識・職業観の未熟さ、身体的成熟傾向にもかかわらず精神的・社会的自立が遅れる傾向など「社会的・職業的自立」などに向けた課題を指摘している。

また、「千葉県畜産新規就業者確保・定着者促進協議会」でも、次の点が話題になった。若者の職業意識が希薄。向上心に欠ける。畜産産業を理解していない。一つのことにつまづく諦めてしまい向き合おうとしない。など、職業人としての基本的性質が育成されていないと指摘があった。

職業人としての資質を向上させるためには、基礎的・基本的な知識や技術の定着を図り、体験的な学習をとおして実践的に知識や技能の定着を図る必要がある。

学校内外の実習は、実践的・体系的な学習であり、産業の認識を高め、基礎的知識や技能を身に付けるのに適した学習プログラムであると考ええる。

農業実習をとおし、産業への意識や勤労意欲の向上を図るとともに、地域との連携を持つことにより、コミュニケーション能力を養い、社会の一員としての意識が芽生え、社会的・職業的自立への道が開かれると考える。

農業に興味、感心をもち入学してくる生徒は多い。しかし、農業への意識を保ちながら、農業関連の進路に結びつけることは困難なことである。現在3年生（平成21年度入学生）の生徒は、非農家の出身で酪農を学んでいる。北海道への校外実習を経験し、酪農関係の大学へ進学するこ

とを決意した。このように、より実践的体験をすることにより、畜産産業がより身近に感じられ、進路実現へつながったと考えられる。

現在、国をあげて雇用の促進、農業経営者・新規就業者の定着が推進されている。今後は、地域産業・行政・学校がより強く結びつき、就農者の確保に向けて学校の果たす役割を考えて行かなければならないと感じた。

## 6 おわりに

今回、教科研究員として農業に従事できる人材の育成について研究の機会をいただきました。研究をとおして地域農業が求める人材を育成するには、

- ・生徒自身の意識向上及び知識・技術の定着
- ・地域農業が農業経営者及び農業従事者の受け入れる態勢や、農業人を育てる体制を整える
- ・学校は指導力の向上と生徒を地域に結びつける
- ・行政は農業従事者の生活の安定化を図る

この4者が同じ方向を示したときに、農業従事者、就農者が生まれると感じました。

教科研究員として2年間にわたり、研究の機会を与えていただいたことをこころから感謝しております。しかし、研究に際して、準備からまとめまで十分とはいえない内容になってしまったことを深く反省しております。

最後に、本研究を進めるに当たり、御多忙の中、懇切丁寧な御指導いただいた、千葉県教育庁教育振興部指導課指導主幹兼教育課程室長 根本進先生、千葉県立君津青葉高等学校 西川明夫先生、本校校長 宗政恒興先生をはじめ、教科研究員の先生方ならび御協力いただきました関係の諸先生方に深く感謝申し上げます。

## 《 参考文献 》

- ・ 高等学校学習指導要領 文部科学省
- ・ 高等学校学習指導要領解説農業編 文部科学省
- ・ 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申） 中央教育審議会